

女仙

芥川龍之介

青空文庫

昔、支那シナの或田舎あるに書生しよせいが一人住んでいました。何しろ支那のことですから、桃の花の咲いた窓の下に本ばかり読んでいたのでしょう。すると、この書生の家の隣うちに年の若い女が一人、——それも美しい女が一人、誰も使わずに住んでいました。書生はこの若い女を不思議に思っていたのはもちろんです。実際また彼女の身の上をはじめ、彼女が何をして暮らしているかは誰一人知るものもなかったのですから。

或風のない春の日の暮、書生はふと外へ出て見ると、何かこの若い女の罵ののっている声が聞えました。それはまたどこかの庭にわとり鳥がのんびりと閑とぎを作っている中なかに、如何いかにも物ものしく聞えるのです。書生はどうしたのかと思いつながら、彼女の家の前へ行つて見ました。すると眉まゆを吊り上げた彼女は、年をとった木樵きこりの爺じいさんを引き据え、ぽかぽか白髪頭しらがあたまを擲なぐっているのです。しかも木樵りの爺さんは顔かお中じゆうに涙を流したまま、平ひらあやまりにあやまつているではありませんか！

「これは一体どうしたのです？ 何もこういう年よりを、擲いらないでも善いいじゃありませんか！——」

書生は彼女の手を抑え、熱心にたしなめにかかりました。

「第一年上のものを擲るといふことは、修身の道にもはずれている訣わけです。」

「年上のものを？ この木樵りはわたしよりも年下です。」

「冗談を言つてはいけません。」

「いえ、冗談ではありません。わたしはこの木樵りの母親ですから。」

書生は呆気あつけにとられたなり、思わず彼女の顔を見つめました。やつと木樵りを突き離れた彼女は美しい、——というよりも凜々りりしい顔に血の色を通わせ、目まじろぎもせずにごう言うのです。

「わたしはこの倅せがれのために、どの位苦勞をしたかわかりません。けれども倅はわたしの言葉を聞かずに、我わがまま儘ばかりしてしまいましたから、とうとう年をとってしまったのです。」

「では、……この木樵りはもう七十位でしょう。そのまた木樵りの母親だというあなたは、一体いくつになつて居るのです？」

「わたしですか？ わたしは三千六百歳です。」

書生はこういう言葉と一しよに、この美しい隣の女が仙人だつたことに気づきました。しかしもうその時には、何か神々しい彼女の姿は忽たちまちどこかへ消えてしまいました。うらうらと春の日の照り渡つた中に木樵りの爺さんを残したまま。……

青空文庫情報

底本：「蜘蛛の糸・杜子春・トロツコ 他十七篇」岩波文庫、岩波書店

1990（平成2）年8月16日第1刷発行

入力：j:uityama

校正：もりみつじゅんじ

1999年5月15日公開

2004年1月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

女仙

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>